

「上田秋成の研究」中村博保著

著者	木越 治
著者別表示	Kigoshi Osamu
雑誌名	国文学研究
巻	130
ページ	150-153
発行年	2000-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/11883

中村博保著『上田秋成の研究』

木越 治

中村博保氏の秋成論がようやく一書にまとめられた。秋成研究者にとつて待望久しい書物の刊行であるが、しかし、それが同時に著者の遺稿集になってしまったことは、かえすがえすも残念なことと言わねばならない。

高田衛氏執筆の「あとがき」によれば、生前の著者には「多くの論考を改稿集成して刊行」しようという意図があったという。私も、かなり以前に研究会で同席した折りそうした意志を著者から直接にうかがったことがある。とすれば、あるいは、著者にとつては不本意なかたちでの刊行になったとも考えられるが、しかし、著者の論考を読むことによつて秋成研究に志し、その枠組みのなかで論文を書きはじめた私どもの世代にとつて、かつて熟読玩味した著者の諸論考が、ほぼそのままのかたちで一併にまとめられたことは、やはりありがたくうれしいことであり、これを機に著者の重厚な論考がより若い世代にも広く読み継がれていくことを期待したいと思う。

今回著者の論文を読み返し、これらがいずれも秋成論の現在に對していまなお貴重な示唆を与えつつける現役の論文であることを改めて確認したが、私個人について言えば、本書の最後に収め

られた「発想のレベル」という論文をようやく読むことができ、長年の夢がかなえられた思いのしたことを、この論文集の刊行によつてもたらされた喜びのひとつとしてぜひとも報告しておきたい気がする。というのは、この論文は、「批評研究」という、国文学プロパーではない雑誌に発表されたものであるため、国文学関係の研究室には送られてきておらず、国会図書館で借り出した当該誌の当該頁は心無い利用者の手でばつさり切り取られていたというような事情があったからである。いわば私にとつて「幻の論文」であつたわけであるが、その論自体は、デ・クレイジアの「信念体系」という概念を援用しつつ、国学を思想的に位置づけていくための原理的な考察を展開したもので、前稿「有効な本質、無効な本質」(こちらも同じ「批評研究」に発表されたものだが、はやくは氏自身の編集による「日本文学研究資料叢書・秋成」に収録されたため、容易に読むことができた)のように宣長との「阿刈度」論争を真正面から取り上げたものではないため、秋成研究史だけからみるとそれほど重要とはいえないかもしれない。ただ、山下一海氏が追悼特集号に寄せた文章(「批評研究」のこと)で言及しているように、早稲田大学の「国文学の近代文学研究室と英文学の研究室の有志」による「文芸評論の同人誌」であるこの「批評研究」という雑誌を通して、氏が本来の批評家的な資質を学問の分野で生かすべく様々な原理的かつ方法的な模索を試みていたことを示す、その意味では貴重な文章といえるように思う。

ここに収められた諸論文は、いずれも秋成研究史において欠くべからざる意義を有するものばかりであるが、私にとつて、氏は

なによりもまず、「目ひとつの神」研究」の著者でなければならぬ。

秋成に興味を持った早い時期から、私は『春雨物語』の文化五年本と富岡本の比較をすすめていけば作品の成立過程を解明していけるのではないか、というようなことを漠然と考えていたが、卒業論文のための資料としてこの論文の載った『近世中期文学の諸問題』という論文集を古書店で入手し読み始めたときの感動はいまでも忘れることができない。それは、私の漠然たる予想をまことにあざやかなかたちで実現したものであったと同時に、はるかその彼方までをも見通す非常に長い射程を持つ論文だったからである。稿本間の丁寧な異同の検討からはじめられているが、決してそれだけに終わるものではなく、母胎となった説話群に目を配りつつ作品成立の背景にせまり、さらに、柳田国男を援用しつつ片目の神の意味を押さえたうえで、佐藤春夫以来の自画像としての目ひとつの神という問題に鋭い照射をあて、さらに文化五年本と富岡本の末尾の違いに焦点をしばりこんだうえで、それが作家秋成における創作意識の変容とどのように関連するのかがという問題を明らかにすべく執拗に追尋していくそのさまは、みごとというしかない。もちろん、現在の研究段階からすれば、草稿群の扱いにはなお検討を要するところであろうし、富岡本を無条件で最終稿とすることも問題なしとはしない。が、そうした問題を超えてなおこの論文は、「目ひとつの神」というこの難解な作品のかかえこんでいるあらゆる問題を総合的に解明することをめざした、まさに一時代を画する論文であると、いまなお私はためらい

なく言い切ることができる。いつか、これを超える「目ひとつの神」論を私自身の手で書き上げることができようだろうか？というのが、今回、この論文の持つ迫力に圧倒される思いで読み返した私自身の率直な感想である。

氏の「目ひとつの神」論は、『春雨物語』研究史においては比較的早い時期に属するものであるが、この段階でこれだけのレベルのものが提示されてしまったということは、別の面からみれば、以後の『春雨物語』研究の方向を決めてしまうことになったといえる。逆説的な言い方になってしまうが、『雨月物語』にあつた牧歌的な感想文の時代をこの論文は『春雨物語』研究から奪ってしまったのである。こんなことを言いたくなるのも、『春雨物語』論の現在を考えると、もう少し素人的な自由な発言が許されているように思うことがままあるからに他ならない。ただし、これは著者の責任であるよりも、それを受け継いだ我々の世代の問題と言うべきなのだろうが……。

もうひとつ、氏の論文で忘れられないのは「秋成の物語論」である。

『ぬば玉の巻』を中心とする秋成の物語論については、「萬言論」の系譜をたどりつつその歴史的文脈を明らかにした中村幸彦氏のすぐれた研究がすでに存在しており、中村博保氏の論文以後にも、中野三敏氏や飯倉洋一氏のすぐれた言及があつて、秋成研究の中では重要な部分を占めるものであるが、著者の論的特質は、『源氏物語』論として書かれたその文章を、徹底して読み込み分

析していくことを通して、秋成自身の表現意識論として読みかえてしまつたところにある。めずらしく講演の形式で書かれているが、その論理構造はきわめて入り組んでおり、そこに至るまでのプロセスを簡単に要約することはできない。しかし、その分析を通して我々は、秋成における「文学」とはなにか、という根本的な命題がここにたしかかなかたちで提示されていることを感じ取つたのである。この論文が直接引用される機会はそれほど多くないかもしれないが、以後の秋成像形成に大きな影響を与えた論文のひとつとしてその評価は今後ともゆるぎないものであると思われる。

本書の構成に触れる余裕がなかったが、全体は

I レトリックと物語論

II 『雨月物語』

III 『春雨物語』

IV 思想と文体

の四部に分けられている。いずれも著者の関心のありように基く適切な表題であるが、しかし、第II部で取り上げられているのは、「浅茅が宿」「夢応の鯉魚」「吉備津の釜」「蛇性の姪」の四編にすぎず、これらだけで氏の『雨月物語』研究を代表させてしまうのはいかにも不当というべきである。同様のことは、「目ひとつの神」「血かたびら」「樊噲」しか取り上げていない第III部についてもいえる。さよう、私は、『雨月物語評釈』（鷗月洋著とクレジットされたこの書が実質的に中村博保氏の手になるものであることはもはや周知の事実であろう）が、氏の『雨月物語』研究の

真髓を示すものであり、『春雨物語』研究もまた、小学館版『日本古典文学全集』によらずして語るべきではないことを言いたいのである。特に、『雨月物語評釈』が以後の『雨月物語』研究に与えた影響ははかりしれないものがあり、さきに私は「目ひとつの神」研究」が以後の『春雨物語』研究の方向を変えたという言い方をしたが、それをはるかに凌駕する画期的な意味を持つていることを、本書とは直接関係しないことながら、やはり、ここに書きとめておきたいと思うのである。

巻末に付された「秋成関係の著作一覧」(鈴木よね子氏編)に従えば、いまあげた氏の業績はほぼ昭和四〇年代に集中しているといえる。この時期の著者や高田衛氏らの活動が、秋成研究の現在の枠組みを形成していることを改めて確認するのであるが、昭和五〇年代以降の氏の活動に関しては、『シンポジウム日本文学・秋成』での発言が記憶される程度で、いささか精彩を欠くという印象はまぬがれがたい。『富士フェニックス論叢(中村博保教授追悼特別号)』(一九九八年十一月)に掲載されている氏の全業績一覧についてみても、この頃の関心は秋成以外へと拡がっていたよううで、著者本来の原理的な志向がよりあらわになっていた時期と見るべきなのかもしれない。

おそらく、著者の秋成研究に転機をもたらすはずであったものは、平成九年に刊行された『藤篋冊子』の校注作業(岩波版)『新日本古典文学大系・近世歌文集 下』所収)であったと思われる。その作業のあとで、氏が『春雨物語』を含む晩年の秋成文学に関してどのような発言を産み出してくるのか、私どもは楽しみにして

いたのだが、その矢先に著者は急逝されたのであった。

残された私達は、本書及びいまあげた氏の手になる三つの評釈・注釈を熟読玩味しながら、氏が秋成研究を通じてめざしたところ——それはすなわち、文学とは何か、小説とはなにか、とい

う問いに他ならないのだが——を、私達自身のテーマとして展開していくしかないのである。

改めて、中村博保氏の御冥福を心からお祈りする次第である。

(一九九九・四 ぺりかん社 A5判 五三頁 八八〇円)